

大人が読みたい絵本

— かかわり合いの知恵を求めて

菊地知子

(保育士)

『ねえねえ、もういちどききたいな
わたしがうまれたよること』

ジェイミー・リー・カーティス作、ローラ・コーネル
絵、坂上香訳 偕成社 1998年

どのページも、「ねえねえ、もういちどききたいな。」と始まるこの絵本。主人公の女の子が、パパとママに話してほしいと繰り返しねだるのは、自分が生まれ、病院に駆けつけたパパとママと「家族」になったときの話です。この絵本は、いわゆるステップファミリーの物語で、養子であるこの子が、繰り返し聞いている自分の出生のときの話を、聞いてうれしい、聞いて安

心する話として私たちに語るのです。家族の形はいろいろであり、愛情の形も、こういう家族だからこう、とパターン化することのできないものであることを、私たちに教えてくれます。生まれたときの話や幼い頃の話、しかも、同じ話を子どもが何度も何度もしてもらいたがる、ということとはとてもよくあることでしょう。それについて津守房江は、「確かめること」という自著の一節の中で、「めざましい成長をする子どもたちにとっては、くり返し自分の存在の確かな基盤に立ち戻ることが必要なであろう。」と言っています。以下に、津守の経験した実際の場面を引用してみたいと思います。

子どもたちの好きだったお話は、この本の他にもいろいろあるが、その一つに、「小さいときのこと」がある。これは、自分たちの小さいときのことを、楽しい童話でも聞くみたいに、くり返し尋ねながら話すお話のことである。

「あたしの生まれたとき、髪の毛生えていた？」
「いいえ、ふわふわの毛がほんの少しだけよ。」

「おとうさん、何ていったの？」

「赤ちゃんは髪がない方が上品だって。」

満足気に笑う姉に、妹が横から待ち切れずになぞねる。

「あたしは？ 髪の毛あった？」

「ええ、黒いふさふさした毛がたくさん生えていたのよ。」

「おとうさん、何て？」

「髪が黒くて立派だって。」

子どもはこの答を知っていて、期待した通りというように笑う。もう、この話を何回したことだろう。子どもたちは、自分が生まれたとき、

両親から待たれ、大切に受け入れられたことを、こんなにも楽しんでくり返す。人生の出発点の確かなときに、くり返し戻るのを見ると、くり返すということは、一つには確かめるためにする行動であると気づかされる。自分にとって確かな点に戻って、そこからまた出発しようとする。めざましい成長をする子どもたちにとって、くり返し自分の存在の確かな基盤に立ち戻ることが必要なであろう。

幼い子どもたちとともに生きているときは、楽しいことばかりではない。子どもがどのように成長していくか分らないままに、混沌のときを持ちこたえていくには、努力と共に精神力を必要とする。そのような日々を、分らないながらも一生懸命生きたとき、それは、子どもたちにとって存在の確かな基盤となっているのであろう。子どもたちがくり返し話す「小さいときのこと」は、大変だったことや、いやだったことも混ざっているのに、暖い思いに満ちてい

る。いま、幼い子どもたちと共に生きることが、子どもたちの人生の基盤を、しっかりと積み重ねていることである。

(津守房江『育てるものの目』 婦人之友社
1984年より)

『タンタンタンゴはババふたり』

ジャスティン・リチャードソン&ピーター・パーネル
文、ヘンリー・コール 絵、尾辻かな子・前田和男 訳

ポット出版 2008年

イギリス在住の、保育士で作家のブレイディ
みかこさんの超話題作『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社 2019年）
の中で、多様性を語るためにイギリスの保育所
では必置になっていると書かれている絵本で
す。タイトル通り、ペンギンのタンゴの育ての
『両親』は、互いに愛しあうパパたちです。卵
をかえす他のカップルをまねして、石を温め続
けるロイとシロの様子から、飼育員さんがそつ

と、他のカップルが温められなかった卵を二人
の巣に置きます。すると二人は一生懸命卵を温
め続け、ヒナをかえます。そうして誕生した
のがタンゴです。タンゴと2羽のお父さんは動
物園の人気者。夜になると、他のペンギン一家
と同じように、動物園の他の動物や、この町に
住んでいる私たちの家族と同じように、自分た
ちの巣に帰り、すやすやと眠りにつきます。

ニューヨークの動物園で本当にあつたお話だ
そうです。ロイとシロを心から祝福したくなる、
とても胸を打つ作品ですが、何といつても私は、
ロイとシロが愛しあっていることに気づき、卵
をそつと巣に置いた飼育員さんの優しさに脱
帽。本当にすてきなお話だと思いました。

『おかあさんになるってどんなこと』

内田麟太郎 文、中村悦子 絵 PHP 研究所
2004年

うさぎのミミちゃんは仲良しのターくんと二

人で外に出て遊び始めます。モコちゃんというお人形を抱っこして、「わたし、きょうはこのこの おかあさんになるの」と宣言。「おかあさんになるって……、どんなこと」ターくんが聞きます。モコちゃんを子どもに見立ててお世話をし、看病もする中で、ミミちゃんには、一つずつ確かな答えが見つかります。

「おかあさんになるって、こどもの なまえをよぶことよ」「こどもと てを つないで あるくことよ」「しんぱいして おもわず ぎゅつと だきしめて おもわず なみだが であることよ」真つ向から「おかあさん」とか「ママ」をテーマにした絵本を取り上げることに、少なからぬ躊躇があります。この世界には「お母さん」「ママ」と呼ぶ人がいない子、失くした子もたくさんいますし、社会的文化的意識の高い人たちに旧態依然の母親像、家族像を是認するよう受け取られて叱られそうで気が引けたりもします。それでも私は、保育を学ぶ学生などにこ

の絵本を紹介することがありますし、ここでも紹介しておこうと思います。「おかあさん」を「傍らにいる人、いようとする人、隣とな人」と読み替えて、子ども事こととして、また自分事こととして読んでほしい、と面倒臭い注文付きで、です。

「隣人」とは、本や映画のタイトルでもあり、その原作者である養護施設長、菅原哲夫さんによる造語です。具体的には、養護施設で寝食を共にし子どもに寄り添う保育士を指しています。ミミちゃんの出した答えは、子どもの傍らにあらうとする者が参考にするには、素朴過ぎるかもしれません。ですが、子どもにとつては、保育的教育的恣意や一方的な期待に満ちたまなざしを向けられるよりも、こういう人になら傍らにあつてほしいと感じるのではないかなと思います。